

## 疫病の流行——律令国家の

## 天然痘への対処法

松尾光

この稿を書き出しているまさに今(二〇二〇年一月二十八日)、中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルスによる肺炎は中国全土に蔓延し、近隣諸国はもちろん、カナダ・フランス・アメリカ・オーストラリアなど十三カ国に罹患者が出ている。死者八十一人、感染者二七四人というが、これが読まれるころにはどれほど増えているだろうか。病原となる細菌やウイルスなどは、進化していくわけじゃないが、つねに突然変異を繰り返していくものだそうで、仮に今のウイルスを制圧できたとしても、変異して生き残ったウイルスがこのさきどのような病気を作り出しながら広がっていくのか予測し得ない。

一、天然痘の蔓延  
こうした恐怖は、古代びとも

味わった。伝染病は数多く流行したろうが、なかでも著名なのが天然痘である。古くは赤裳瘡(あかもがさ)・豌豆瘡(えんどうそう)、平安時代に疱瘡、室町時代に痘瘡と呼ばれており、天然痘というのは肥前大村藩藩医の天保元年(一八三〇)の文書にはじめて出てくる名だそう(山内一也氏著『近代医学の先駆者 ハンターとジェンナー』岩波書店、十一頁)。この病気は天然痘ウイルスによって惹き起こされ、頭痛・筋肉痛・倦怠感と発熱にはじまり、数日後には顔や四肢の皮膚や粘膜に多数の赤い小さな発疹があらわれ、その後は四十度を超す高熱のなか下痢・嘔吐を繰り返す(『改訂新版家庭医学大事典』小学館、一九九二年)。発疹は水泡となり、膿を噴き出すが、やがて瘡蓋(かさぶた)ができ、それが

落ちて平癒する。その間の致死率は二〇%から五〇%と高く、発疹のあとには痘痕(あばた)が残る。一七九六年にエドワード・ジェンナーが確立した種痘法が普及し、一九八〇年五月にはWHOが「世界的根絶に成功した」と宣言している。

現在最古例とされているのは古代エジプト第二十王朝のファラオで、紀元前一四一年に死亡したラムセスVのミイラに癩痕がある。エジプト遠征などによってローマ帝国内に持ち込まれ、やがて四世紀にはアジア各地へと広がりを見せた。

日本に持ち込まれたのは、朝鮮半島の百濟(くだら)經由である。欽明天皇七年(五三八、『日本書紀』では宣化天皇三年)に百濟の聖明王から釈迦仏像・経論が齎され、廷内では国教とするかどうかで一悶着あり、結果として大臣・蘇我稲目の預かりとなった。ところがその直後から疫病が流行りはじめた。反対派は国神(くにつかみ)の怒りを買ったためと解釈し、天皇の同意をうけ、仏像を難波の堀江に投棄した。ついで敏達天皇

十四年(五八五)にも、蘇我馬子が大野丘に仏塔を建てて大会を催した直後に、同様な疫病が流行した。蔓延した病はおそらく天然痘で、最初の仏像搬入に当たった百濟人一行のだけれが罹患していて、日本人に感染させたようだ。二度目の流行は脚色かもしれないが、事実だったとすれば、天然痘が再発する周期が四十年前後なので、流行の第二波ということになる。以降昭和三十一年(一九五六)まで、三十年から五十年ほどの周期で天然痘は大流行を繰り返してきた(富士川游著『日本疾病史』東洋文庫、平凡社)。

## 二、天平の大流行

古代での大流行といえば、聖武朝の凄惨な地獄絵図が著名だ。

『続日本紀』には、天平七年(七三五)八月、「聞く如(なら)く、比日、大宰府疫死する者多し、疫気を救療して以て民の命を濟(すくわ)むと欲し……」府の佛寺(おおでら)(観世音寺)及び別国の諸寺に金剛般若経を讀ましむ」といい、「大宰府

が管内諸国の疫瘡大いに発（おこ）り、百姓悉く臥せり。今年の間、貢調を停めんと欲す」と奏して認められている。その一方で「長門より以遠の諸国の守若（もし）くは介、専（も）はら齋戒して道饗（みちあえ）して祭祀せしむ」として、病魔の東進を呪力で阻もうと必死だ。

（ぎもこ）を 行きてはや見む 淡路島 雲居に見えぬ 家付くらしも（巻十五―三七二〇）とあって帰心矢のごとしの気持ち伝えるが、都びとにとつて彼らは疫鬼となった。

この病気は二月に來朝した新羅使が齋したもので、このときは朝廷が使節団の非礼を咎めて退去させたため、罹患の範囲も小規模で済もうとしていた。しかし新羅使への応答として、天平八年二月、日本側から遣新羅使が派遣された。新羅も報復して日本の使者を受け容れずに退去させたのだが、新羅現地には天然痘が蔓延していた。病人に囲まれてきた日本の使者が、罹患した状態で天平九年一月に帰国。すでに大使・阿倍継麻呂は対馬で死没していたが、残りの一行は復命するため病身に鞭打って都へ入った。そのため、立ち寄った対馬・壹岐から西日本全体、平城京・平城宮へと病気が広がった。

国政を審議・領導する公卿八人のうち藤原武智麻呂と三兄弟及び中納言の多治比県守（たじひのあがたもり）が死亡し、二人の参議しか残らなかつた。三位以上の高級貴族たちの半数以上が失われた。流行はさらに東進して七月には若狭・伊豆・駿河が疫病と飢饉に苦しみはじめた。疫病で倒れた人が農作業に立てず、漁民も操業できない。流通にかかわる人も動けないから、物資欠乏によつて村は飢えにも襲われた。

『万葉集』では「我妹子（わ

また稲の公出挙（くすいこ）（政

府系機関による高利貸し）では借主が死亡すれば債務を免除されることになっており、天平六年の尾張国の郷別の平均死亡者数は三・七人ほどであった。それが天平九年の和泉監（いずみげん）では二十三人、駿河国では四十六・四人となっている（『大日本古文書』の当該国の正税帳）。つまり平年の六・二倍から十二・五倍の死者が出ていたのである。

この事態への政府の対応は、主が寺院・神社での「攘災（じょうさい）祈禱で、従として食料支援や気休めの医薬品を配布することであった。そのなかで宣旨を承けた典葉寮（てんやくりょう）が勘申（かんしん）し、国から配られた天平九年六月付の「瘡瘡の治し方の事」が『朝野群載』に残されている。

傷寒（熱病のこと）豌豆病の治し方

初め発覚して作（な）さむと欲さば、則ち大黃（だいおう）五両を煮て、之を服せ。又青木香二両、水三升で一升を煮取りて頓服せよ（一氣に飲め）。又、好（よ）き蜜を取り、身を通し

て瘡の上を麻子へ（麻一蔽え）か。又黃連（おうれん）三両、水二升を以て八合を煮取りて、之を服せ。又小豆の粉と鶏子の白（卵白）を和（あ）へ、之を付けよ。又月汁を取り、水で和へて之を浴びよ。又婦人の月布にて小児を拭はば、豌豆瘡の癩（はん）を滅す（下略）。

とある。女性の経血を薄めて浴びるとか月布で拭つて瘡を減らすなどの方法は、仏教では血穢（ちのけがれ）として忌まれる。しかし神社ではかつて鶏の赤い血を撒くことで神聖な場を作つていたから（拙稿「古代人と血」）、民間古俗に継（すが）つたまさに「薬をも掴む」つもりでの指示だろう。いずれも、今となつては効果のない治療法である。

ジェンナーが牛による種痘法（牛痘法）を発見する前に、東洋でも人の痘瘡を粉末にして鼻から吸入し、軽く感染しておくという予防法（人痘法）が採られていた。一度罹患した人は発症しないことを、経験で学んでいたからである。とはいえそれも宋代からのこと。日本の長崎に伝わったのはやっと延享元

年（一七四四）で、しかもわざわざ病人を作るような行為として危険視されていた（小川鼎三氏著『医学の歴史』中公新書、一四四頁）。

こうした状況を、今の医療知識と技術の高みから「物知らぬ愚民たちの騒ぎ」と嗤（わら）うこともできる。しかし新型コロナウイルスに怯えるいまの私たちの医療知識や技術も、二百年後の人の眼には「物知らぬ愚民たちの騒ぎ」と映るのではないか。私たちの医療知識の高みといつても、「パニック症候群」とか「起立性調節障害」とかは症状をそのまま記しただけで、病気の根本的原因を特定できている名称でない。私たちが、病気との関係では古代びととさしてかわらぬ状況にいる。そういう自覚も、歴史から学び取るべきだろう。（早稲田大学エクステンションセンター講師）

## ヒストリー・メモ

### 感染症の世界的大流行の歴史と脅威

#### 【天然痘】

16世紀、スペインのアメリカ大陸侵略時にこのウイルスで先住民が激減。1796年、英国のエドワード・ジェンナーが種痘を開発。予防接種のさきがけ。

（松尾先生の特別寄稿参照）

\*右は1849年佐賀藩藩主 鍋島正直が長男直大に種痘を打たせている図



#### 【コレラ】

今まで7回のコレラ・パンデミック発生。1884年ロベルト・コッホ（独）がコレラ菌発見。下水道の整備等衛生的な近代都市の生みの親になった。

#### 【ペスト】

14世紀にヨーロッパの人口の1/3~1/4が死亡（黒死病）。

1894年、北里柴三郎（日本）、アレクサンドル・イエリサン（仏）が病原菌発見。

#### 【インフルエンザ】

●スペイン風邪：人類が遭遇した最初のインフルエンザ。1918年感染者6億人（当時の世界人口12億人）、死者4000万~5000万人。日本では人口5500万人のうち39万人が死亡。

●アジア風邪：H2N2亜型ウイルス。1957年死者200万人以上（日本約8000人）。

●香港風邪：H3N2亜型ウイルス。1968年死者100万人以上（日本2200人以上）。

●鳥インフルエンザ：H5N1型ウイルス。1997年死者約400人

●SARSコロナウイルス肺炎：重症急性呼吸器症候群。中国広東省起源。2003年7月WHO終息宣言。患者8093人、死者774人

●MARSコロナウイルス肺炎：中東呼吸器症候群。ヒトコブラクダが感染源。2019年11月までの患者約2500人。死者858人。現在時点でも未終息。

●新型インフルエンザ：A/H1N1型ウイルス。世界で死者10万~40万人。

●新型コロナウイルス肺炎：COVID-19。現在進行中。スペイン風邪以来最大の被害？



スペイン風邪患者で溢れる米軍野戦病院

（主な出典：ウィキペディア）編・記